幼児の生活と行事

神沢良輔

(一)

最近、わが国の保育内容の変遷について見直す機会に恵まれた。そこで改めて気づいたことの一つに〝行事〟という問題があった。

すくなくとも、東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）に附属幼稚園が創立（明治九年）されて以来、保育内容は、戦前の保育課（科）目、保育項目（明治三十二年の幼稚園保育及設備規程では、遊戯、唱歌、談話、手技の四項目、大正十五年の幼稚園令では、それに観察が加わり五項目）の時代を経て、戦後は、保育要領（昭和二十二年度）、幼稚園教育要領（昭和三十一年、三十九年）というように、いろいろとその時代の要請により、公的なものは、示し方や考え方、方法、内容に変化のあるものの、その中で、表面にはあまり出ず、しかも実際の保育内容として、きわめて自然になされていたものとして、〝行事〟というものがあったのではないかと思う

のである。

そこで、行事についてのべた、戦前、戦後の二つの例をあげてみよう。

戦前のものとしては、東京女子高等師範学校附属幼稚園の実践をまとめた、〃系統的保育案の実際〃(昭和十年)の中にみられるものである。この解説の中で、倉橋惣三は、そのもっとも核心的部分と思われる〃誘導保育案〃について、〃さて、誘導保育案であるが、別段はっきりした定義があるはずではない。保育項目を保育項目として、個々別々に、しかも突発的に課してゆくのでなく、何かしら一つの主題を以って誘導していくところから、この名称を付した。……(中略)……

主題は極端にいえば、何んでもいいが、幼児の年齢に適するを必要とし、季節、行事等に即するを便宜とする。しかし、必ずしも季節、行事等とに関わらず、幼児の現在の興味に合致するものから自在に選ばれていい。選ぶというよりも、幼児達の間からおのずから、まとまってくることも多い。〃とのべている。

このように、誘導保育案における行事のとりあげ方は、決して積極的ではないが、幼児たちの経験のまとまりとしての意義を認めている。そして、その中で実際にとりあげられた行事に関する主題としては、年少では、〃七夕まつり〃〃秋祭り〃〃お月見〃〃お正月〃〃節分〃〃ひなまつり〃などがみられ、年長では、〃五月節句〃〃七月祭り〃〃お月見〃〃節分〃〃ひな祭り〃などがみられる。

また、戦後のものとして、昭和二十三年に公刊された〃保育要領〃では、保育内容の例として示された十二項目の最後の項目として、〃年中行事〃をあげている。これは、公的なものとして行事をとりあげた、最初にして最後(?)のものであろう。その中では、

〃幼児の情操を養い、保育に変化と潤いを与え、郷土的な気分を作ってやる上から、年中行事はできるだけ保育にとり入れることが必要である。〃とその意義をのべ、それを二つの面からみている。つまり、

〃元来、わが国古来から行われている年中行事、ことに祭などは、子供が参加し、楽しむ行事になっている。たとえば、三月のひな祭、五月の端午の節句、七月のたなばたなどは子供を中心としている。これをそのまま保育に取り入れて、ともに楽しみ合う気持を養うことができる。〃と、伝承的な行事と、それの保育に及ぼす意義

をのべるとともに、

〃年中行事には自然物がきわめて巧みに取り入れられている。たとえば、ものの節句、しょうぶの節句、月見の秋の七草、クリスマスツリーなど、生活を自然に結びつけさせる味があり、また人間の美しい気持を表現しているもの、または慈悲・博愛・感謝・報恩の人間的な美しい精神や社会的生活の楽しさを表わしているものが多い。たとえば母の日、彼岸会、国の記念日、祝祭日等、みなそれである。〃と、行事と自然や季節の変化との関係を中心に、幼児の生活と行事の意義についてのべている。さらに、

〃園の行事としては、創立記念日、園児や先生の誕生日の会などを開くのもよい。〃として、園の行事についてもふれている。

(二)

すこし引用が長くなったが、これらの叙述の中に、行事についての保育における本質は、ほとんどいいつくされているといえよう。

すくなくとも〃行事〃は、幼児の経験をまとめるということで、また、そこに幼児の生活があるということで、保育内容の中に、きわめて自然に入りこんできたといえる。だから、行事をとりあげることは、幼児の生活をたいせつにしていこうとする保育の伝統的な営みでもあった。

このことは、敗戦後における保育内容の混乱を奇妙なことで救ったものといえる。この時期は、アメリカから、いわゆる経験主義教育が導入され、小学校では、社会的機能を分析し、それを経験のまとまりとしての単元に、どのように構成し、どのように展開していくかということが大きな問題となった。しかし、幼稚園では、行事を単元としてまとめて、それを季節によって並べることによって、これまでの保育内容とあまり大きな変化なく続けていくということに成功した(?)ということがいえる。もちろん、これについては、行事カリキュラムで内容がないということで、いろいろの批判がなされた。たしかに、いわゆる行事カリキュラムは、行事のために保育をするということにもなりかねないし、現在の保育の中でも多くの問題を残していることは事実であ

る。

しかし、わが国では、季節によって、自然は常に変化している。〃つくし〃をとりにいって春を感じ、木々の若葉をみて初夏を感じるのである。幼児の折ふしの移り変りに対する感じ方はまた格別のものである。

それは、伝承的な行事の中にもくみ入れられてきている。すくなくとも、いろいろな地域に伝わる〃祭り〃は、このような自然の変化に対応したものであろう。しかも、それは、毎年毎年、自然の変化の中でくり返されてきた。だから、その中での安定感があった。

だが、現在のような自然を失った生活の中で、また、伝承的な地域の行事が減少していく中で、幼児にとって行事は、生活からしだいに遊離したものになっていっているといよう。

(三)

このようにみていくと、すくなくとも行事は、現在の幼児にとって、どのような意味をもたせるべきかという、行事についての新しい問題がでてくる。

だが、行事に対する保育者の執着心は、これまでみてきたようにきわめて強い。それは、幼児教育の歴史とともに現在まで残されているからである。このことは、一方では、行事は毎年くり返されるということにより、保育者にとって、もっとも安定感のある保育内容となっているということによろうし、他方では、なんとかして、幼児の園での生活に変化を与え、うるおいを持たせようとする善意のあらわれでもあろう。

しかし、このような、行事が幼児の生活から離れつつある時期だからこそ、ここで行事について、いま一度その本質にかえって、考え直してみる必要があると思うのである。

それは、行事の単なる否定ではなく、幼児教育における意義を認めるということの前提の上にたって、保育者の便宜のためではなく、幼児にとって意味のあるものにしていかなければならない、幼児教育の課題であろう。

(十文字学園女子短期大学)